社会化における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の三立可能空間（その１）

高　澤　　勇

目　次

要　約
1　序　論
2　自我における絶対的不平等と絶対的不自由と絶対的不愛について
2・1　自我における絶対的不平等について
2・2　自我における絶対的不自由について
2・3　自我における絶対的不愛について
3　自我における絶対的不平等と絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について
3・1　自我における絶対的不平等と絶対的不自由の相関関係について
3・2　自我における絶対的不平等と絶対的不愛の相関関係について
3・3　自我における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について
3・4　自我における絶対的不平等と絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について
4　自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について
4・1　自我の五段階欲求における絶対的不自由について
4・2　自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について
5　三視点からみた絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛について
5・1　三視点からみた絶対的平等について
5・2　三視点からみた絶対的自由について
5・3　三視点からみた絶対的愛について

6　三視点からみた絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の相関関係について
6・1　三視点からみた絶対的平等と絶対的自由の相関関係について
6・2　三視点からみた絶対的平等と絶対的愛の相関関係について
6・3　三視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について
6・4　三視点からみた絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の相関関係について
7　無我における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛について
7・1　無我における絶対的平等について
7・2　無我における絶対的自由について
7・3　無我における絶対的愛について
8　無我における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の相関関係について
8・1　無我における絶対的平等と絶対的自由の相関関係について
8・2　無我における絶対的平等と絶対的愛の相関関係について
8・3　無我における絶対的自由と絶対的愛の相関関係について
8・4　無我における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の相関関係について
9　無我における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の三立可能空間について
9・1　無我における絶対的平等の空間について
9・2　無我における絶対的自由の空間について
9・3　無我における絶対的愛の空間について
9・4　無我における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の三立可能空間について
10　結　論

はじめに

本稿は、目次に掲げたように、全体で１０章になるのであるが、本学紀要規定における紙幅の関係により、目次の全体内容を掲載することができないので、

今回は、その中の「要約」第１章から第４章までを掲載する。第５章から第１０章「注」「文献」「英文要約」は、次回以降に掲載する予定である。全体を掲載できないために、「注」「文献」および全体内容の相互比較等においてご不便をおかけして恐縮ですが、ご了承下さい。

要　約

本稿の目標は、社会化[1]における絶対的平等と絶対的自由[2]と絶対的愛[3]の三立可能空間を解明することである。この目標に向かって、まず第１章においては、本稿における研究の前提となる、これまでの研究結果の要約を掲げた。この研究結果に基づいて、第２章においては、「自我における絶対的不平等と絶対的不自由と絶対的不愛について」を研究した。第２章第１節においては、「自我における絶対的不平等について」を研究した。第２章第２節においては、「自我における絶対的不自由について」を研究した。そして第２章第３節においては、「自我における絶対的不愛について」を研究した。

第３章においては、「自我における絶対的不平等と絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について」を研究した。第３章第１節においては、「自我における絶対的不平等と絶対的不自由の相関関係について」を研究した。第３章第２節においては、「自我における絶対的不平等と絶対的不愛の相関関係について」を研究した。第３章第３節においては、「自我における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について」を研究した。そして第３章第４節においては、「自我における絶対的不平等と絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について」を研究した。

第４章においては、「自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について」を研究した。第４章第１節においては、「自我の五段階欲求における絶対的不自由について」を研究した。そして第４章第２節においては、「自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係につ

いて」を研究した。

第5章においては、「三視点からみた絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛について」を研究した。第5章第1節においては、「三視点からみた絶対的平等について」を研究した。第5章第2節においては、「三視点からみた絶対的自由について」を研究した。そして第5章第3節においては、「三視点からみた絶対的愛について」を研究した。

第6章においては、「三視点からみた絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究した。第6章第1節においては、「三視点からみた絶対的平等と絶対的自由の相関関係について」を研究した。第6章第2節においては、「三視点からみた絶対的平等と絶対的愛の相関関係について」を研究した。第6章第3節においては、「三視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究した。そして第6章第4節においては、「三視点からみた絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究した。

第7章においては、「無我における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛について」を研究した。第7章第1節においては、「無我における絶対的平等について」を研究した。第7章第2節においては、「無我における絶対的自由について」を研究した。そして第7章第3節においては、「無我における絶対的愛について」を研究した。

第8章においては、「無我における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究した。第8章第1節においては、「無我における絶対的平等と絶対的自由の相関関係について」を研究した。第8章第2節においては、「無我における絶対的平等と絶対的愛の相関関係について」を研究した。第8章第3節においては、「無我における絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究した。そして第8章第4節においては、「無我における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究した。

第9章においては、「無我における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の三立可能空間について」を研究した。第9章第1節においては、「無我における

絶対的平等の空間について」を研究した。第９章第２節においては、「無我における絶対的自由の空間について」を研究した。第９章第３節においては、「無我における絶対的愛の空間について」を研究した。そして第９章第４節においては、「無我における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の三立可能空間について」を研究した。

そして第10章においては、上記の研究結果としての本稿の結論を述べた。それは以下のように要約することができる。

社会化における人間的視点や生物的視点および物質的視点からみた個人の絶対的平等は、人間の本性は「不生の単種単一の素粒子」（哲学的・物理学的見解）[4] のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学見解）[5] または「無的主体」（仏教的見解）[6] の縁起である、ということを知ることによって可能となる。なぜならば、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」のような「分割不能の点的存在」または「無的主体」であり、それは宇宙のすべての生物の本性と同様であり、それはまた、宇宙のすべての物質の本性と同様である、ということを知れば、すべての人間や生物および物質は「不生の単種単一の素粒子」のような「分割不能の点的存在」または「無的主体」である点において絶対的平等であることが理解できるからである。

また、社会化における人間的視点や生物的視点および物質的視点からみた個人の絶対的自由も、人間の本性は「不生の単種単一の素粒子」（哲学的・物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解））である、ということを知ることによって可能となる。なぜならば、上記のように、人間の本性は「不生の単種単一の素粒子」のような「分割不能の点的存在」または「無的主体」であり、それは宇宙のすべての生物の本性と同様であり、それはまた、宇宙のすべての物質の本性と同様である、ということを知れば、すべての人間や生物および物質は「不生の単種単一の素粒子」のような「分割不能の点的存在」または「無的主体」である点において絶対的に平等であり、それゆえ、宇宙におけるすべての人間間や生物

間および物質間においては、いかなる上・下の関係も支配・被支配の関係も存在することができないことになるからであり、さらに、それゆえ、宇宙におけるすべての人間や生物および物質は、上記の点において、絶対的自由であることが理解できるからである。

そして、社会化における人間的視点や生物的視点および物質的視点からみた個人の絶対的愛も、人間の本性は「不生の単種単一の素粒子」（哲学的・物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解））の縁起である、ということを知ることによって可能となる。なぜならば、上記のように、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」のような「分割不能の点的存在」または「無的主体」であり、それは宇宙のすべての生物の本性と同様であり、それはまた、宇宙のすべての物質の本性と同様である、ということを知れば、すべての人間や生物および物質は「不生の単種単一の素粒子」のような「分割不能の点的存在」または「無的主体」である点において絶対的に平等であり、それゆえ、宇宙におけるすべての人間や生物および物質においては、絶対的不平等から誕生してくる、上位者に対する下位者の嫉妬・嫌悪などの絶対的不愛の類の感情や下位者に対する上位者の哀憐・蔑視などの絶対的不愛の類の感情が生じ得ないからである。また、上記のように、人間の本性は「不生の単種単一の素粒子」のような「分割不能の点的存在」または「無的主体」である点において絶対的に自由であり、それゆえ、宇宙におけるすべての人間や生物および物質においては、絶対的不自由から誕生してくる、上位者に対する下位者の嫉妬・嫌悪などの絶対的不愛の類の感情や下位者に対する上位者の哀憐・蔑視などの絶対的不愛の類の感情が生じ得ないからである。そして、ひとは、宇宙におけるすべての人間や生物および物質の本性は「不生の単種単一の素粒子」（哲学的・物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）の縁起である、という宇宙の真実相におけるすべての人間や生物および物質においては、いかなる絶対的不愛も生じ得ないということを知るとき、宇宙にお

けるすべての人間や生物および物質において絶対的愛が生じる可能性があることを知るのである。

したがって、社会化における個人の絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の三立可能空間は、上記の、社会化における個人の絶対的平等と絶対的自由および絶対的愛の可能空間と同様に、宇宙におけるすべての人間や生物および物質の本性は「不生の単種単一の素粒子」（哲学的・物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）の縁起である、という宇宙の真実相を純粋直観したときに始めて知ることのできる、この宇宙それ自体である。

キーワード：社会化、絶対的平等、絶対的自由、絶対的愛、素粒子、無的主体、絶対的平安、絶対的平和

1　序　論

わたくしの社会学の主題は「人間の社会化における最終目標は何であるのか。そこに到達する道は何処にあるのか。それらを論理的に解明したい。」ということである。本稿は、この一連の研究における新しい一部分をなすものである。

この研究主題の論理的解明に向かって、まず第１に、わたくしは、拙論「社会化の原動力―体系の大要―」を公表した。（髙澤**1997**）そこでは、個人はなぜ社会を生み出すのかという主題の解明に主眼をおいた[7)]。

第２に、わたくしは、拙論「社会化の発展」を公表した。（髙澤**1998**）そこでは、社会化の原動力によって生み出された、個人における最初の社会化および社会はいかにして発展するのか、という主題の解明に主眼をおいた[8)]。

第３に、わたくしは、拙論「社会化の最終目標」を公表した。（髙澤**2006**）そこでは、社会化の原動力によって生み出された、個人における社会化の最終目標は何であるのか、という主題の解明に主眼をおいた[9)]。

第４に、わたくしは、拙論「社会化の最終目標への道」を公表した。（髙澤

2009）そこでは、社会化の原動力によって生み出され発展した、個人の社会化の最終目標への道はどのようなものであるのか、という主題の解明に主眼をおいた[10]。この「社会化の最終目標への道」において到達した結論は次の通りである。

「人間の社会化の最終目標は絶対的平安である。個人が絶対的平安であるためには人生における諸々の苦痛から開放されなければならない。諸苦痛から開放されるためには、その諸苦痛が発生してくる根源を知らなければならない。仏教によれば、その諸苦痛の根源は無明にある。無明とは宇宙の真実相に対する無明である。では、宇宙の真実相とは何であるのか。宇宙（万物）の真実相とは空である。宇宙（万物）は空であるとはどういうことであるのか。宇宙（万物）は空であるとは、宇宙（万物）は「不生の単種単一の素粒子」のような「分割不能の点的存在」または「無的主体」が縁起することを繰りかえして絶えることのない姿であるから、固定した実体というものがないということである。ひとは、この宇宙（万物）の真実相を知ることによって苦痛から開放されて社会化の最終目標である絶対的平安に到達することができるのである。[11]」（髙澤2009：65-6）

さて、絶対的平安とは絶対的平等・絶対的自由・絶対的愛の境地のことでもある。したがって、絶対的平安に到達するためには絶対的平等・絶対的自由・絶対的愛の境地に到達しなければならない。では、どのようにすれば、絶対的平等・絶対的自由・絶対的愛の三者共立の境地に到達することができるのであろうか。それを知るためには、まず第１に、社会化における絶対的平等とは何であるのか、また、そこに到達する道は何処にあるのか、ということについて知らなければならない。第２に、社会化における絶対的自由とは何であるのか、また、そこに到達する道は何処にあるのか、ということについて知らなければならない。第３に、絶対的平等と絶対的自由とは両立が可能であろうか、また、それが可能であるならば、その空間は何処であるのか、ということについて知らなければならない。第４に、社会化における絶対的愛とは何であるのか、ま

た、そこに到達する道は何処にあるのか、ということについて知らなければならない。そして、第5に、社会化における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛とは三者共立が可能であろうか、また、それが可能であるならば、その空間は何処であるのか、ということについて知らなければならない。

それで、わたくしは、上記の「社会化の最終目標への道」に続いて、第5に、「社会化における絶対的平等への道」を公表した。(髙澤2010) そこでは、社会化における絶対的平等とは何であるのか、また、そこに到達する道は何処にあるのか、という主題の解明に主眼をおいた[12)]。

第6に、「社会化における絶対的自由への道」を公表した。(髙澤2011) そこでは、社会化における絶対的自由とは何であるのか、また、そこに到達する道は何処にあるのか、という主題の解明に主眼をおいた[13)]。

第7に、「社会化における絶対的平等と絶対的自由の両立可能空間」を公表した。(髙澤2012) そこでは、社会化における絶対的平等と絶対的自由の両立可能空間は何処であるのか、という主題の解明に主眼をおいた[14)]。

第8に、「社会化における絶対的愛への道」を公表した。(髙澤2013) そこでは、社会化における絶対的愛とは何であるのか、また、そこに到達する道は何処にあるのか、という主題の解明に主眼をおいた[15)]。

したがって、次には、社会化における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の三立可能空間は何処であるのか、ということについて解明しなければならない。

この命題の解明に先立って、既に、上記の「社会化における絶対的愛への道」においても触れたことであるが、ここで、歴史上に現われた周知の概念である「自由・平等・博愛」について、再度、少し述べておきたい。

この「自由・平等・博愛」という最高理念は、正確にいえば、「絶対的自由・絶対的平等・絶対的博愛」でなければならない。なぜならば、人類が意識的に、あるいは無意識的に求め続けているものは絶対的平安の心境であり、相対的平安の心境では不充分だからである。したがって、それは「相対的自由・相対的平等・相対的博愛」ではない。絶対的平安の心境に到達するためには、

「絶対的自由・絶対的平等・絶対的博愛」の心境に到達しなければならない。「絶対的自由・絶対的平等・絶対的博愛」の心境に到達することができないにもかかわらず、絶対的平安の心境に到達するということは不可能である。

さて、「相対的自由・相対的平等・相対的博愛」という概念は、人類史上において常に、また、あらゆる社会・集団において顕在的に具現している。しかし、「絶対的自由・絶対的平等・絶対的博愛」という最高理念は、人類史上において顕在的に具現したことがない。では、この「絶対的自由・絶対的平等・絶対的博愛」という最高理念は何処にあるのか。人類は、自分に与えられた人生のあらゆる時間において、また、自分の所属している集団や社会や国家において、それを求め続けている。しかし、この最高理念は、人類史の暗黒の時代に希望の光を放ち、人類の向かうべき究極目標を示し、人類の知性を導き続ける存在であったが、そこに到達できる道は見つからなかった。自我の哲学（形而上学）の道を歩きつづけてもそこに到達できなかった。自我の形而下学である心理学の道も、政治学の道も、また経済学の道も、そして社会学の道も、そこに到達できなかった。それは、自我意識の次元の学問では到達不能な一条の智光の源のごとき最高理念でありつづけている。

ところで、「自由・平等・博愛」の最高理念の現実化を求める政治的・経済的・社会的等の改革や革命は、人類史上に現象したあらゆる国・社会・集団において誕生と消滅を繰り返している。しかし、自由であり、平等であり、しかも博愛であることは如何にして可能であるのか。この矛盾について、ドイツの社会学者であるＧ．ジンメルは、約１００年前に、『社会学の根本問題』のなかで、ゲーテの意見を引用しながら、次のように述べている。

その内容についての詳細は、拙論「社会化における絶対的愛への道」（髙澤**2013**）において記述したので、重複を避けて、ここでは要点だけを述べておきたい。

「万人の完全な自由は、万人の完全な平等があるところに初めて生れることが出来る。しかしながら、完全な平等というのは、全く個人的のものにおいて

実現され得ないのみならず、経済的なものが個人の優越性の利用を許す限り、経済的なものにおいても実現され得ない。この可能性が排除されて初めて、即ち、生産手段の私有が廃止されて初めて、ここに平等が可能になり、そして、不平等と不可分の自由の制限が除かれる。明らかに、ほかならぬ、この「可能性」という点に自由と平等との深刻な矛盾が現われている。なぜなら、この矛盾は、自由と平等とが無所有及び無権力という否定的なものへ沈下することによってのみ解決されるのであるから。当時、この矛盾を鋭く見抜いていたのはゲーテだけであったかと思う。彼によれば、平等は一般的規範への服従を求め、自由は「無拘束へ向う。」「立法者にしろ、革命家にしろ、平等と自由とを同時に約束する者は、夢想家か山師である。」恐らく、こういう事態を救おうという本能が働いたのであろう、本能は、自由及び平等に第三者の要求として友愛を加えさせた。なぜなら、自由と平等との矛盾を除去するのに強制という手段を認めないとすれば、除去の効果を挙げるには、公然たる利他主義しかないから、即ち、自由が平等を亡ぼしてしまった以上、天賦の才能の発揮を道徳的に断念することだけが平等を回復する道になる。」（ジンメル**1979：104—5**）

では、ドイツの社会学者・哲学者であるジンメルやドイツの文豪ゲーテが賢くも指摘したように、「自由・平等・博愛」は人類史上において常に虐げられてきている無数の人々が切実に希望する理念の並列に過ぎないのであろうか。それらは実現不能の希望的理念でしかないのか。自由であり、平等であり、しかも博愛であることは人間社会においては永遠に不可能なことなのであろうか。

この歴史社会上のいかなる人々においても常にその実現が希求され続けている「自由・平等・博愛」への道を解明することは、冒頭に述べた、わたくしの社会学の主題である「人間の社会化における最終目標は何であるのか。また、そこに到達する道はどこにあるのか。それらを論理的に解明したい。」という一連の研究における最終目標としての「絶対的平安の心境」に到達する大道を、「不生の単種単一の素粒子」という哲学的・物理学的視点、「分割不能の点的存

在」という数学的・幾何学的視点、「無的主体」という宗教的視点からばかりでなく、心理学的視点や政治学的視点あるいは社会学的視点から理解するために必要不可欠ある。

そこで、既に触れた拙論「社会化における絶対的愛への道」に続いて、本稿では、人間の社会化における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の三立可能空間は何処にあるのか、という命題を解明する。

2　自我における絶対的不平等と絶対的不自由と絶対的不愛について

本稿の目標は、社会化における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の三立可能空間は何処であるのか、という命題を解明することである。この目標に向かって、この第２章においては、「自我における絶対的不平等と絶対的不自由と絶対的不愛について」を研究する。まず第１節では、「自我における絶対的不平等について」を研究する。第２節では、「自我における絶対的不自由について」を研究する。そして第３節では、「自我における絶対的不愛について」を研究する。

２・１　自我における絶対的不平等について

本節の目標は、自我における絶対的不平等は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

さて、この自我における絶対的不平等の解明については、既に、拙論「社会化における絶対的平等への道」（髙澤**2010**）において記述したので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の要点を述べるに止めておきたい。

人間は、個人対個人という視点から人類史上において誕生した全ての人間を見れば、いかなる二者においても絶対的に不平等である。

人類史上という時間上において全く同一の時刻に誕生した人数は少ない。１００分の１秒を単位として調査すれば、極めて小数であろう。

その小数の人々の中で、全く同内容の細胞を所有している人はいないと考えてよいであろう。

この程度の常識的レベルにおいてさえも、生物学的側面から人類史上において誕生した全ての人間を比較して見れば、いかなる二者においても絶対的に不平等である。

この絶対的不平等の身体（人間的、動物的、生物的、物質的などのあらゆる側面からみた身体）に属する五官である眼・耳・鼻・舌・身は、言うまでもなく、絶対的不平等である。また、この五官に対応する五感である色・声・香・味・触も、言うまでもなく、絶対的不平等である。さらに、この五感から生じてくる意識とその記憶もまた、言うまでもなく、絶対的不平等である。そして、この意識とその記憶を自分のものとして統括する自我もまた、言うまでもなく、絶対的不平等である。

したがって、「自我における絶対的不平等は如何なるものであるのか」という冒頭の命題の解明は、要約すると以下のようになる。

絶対的不平等の身体から生じる五官および五感は共に絶対的不平等であり、その五感から生じる意識とその記憶もまた絶対的不平等である。そして、その意識とその記憶を自分のものとして統括する自我もまた絶対的不平等である。

２・２　自我における絶対的不自由について

本節の目標は、自我における絶対的不自由は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

さて、この自我における絶対的不自由の解明については、既に、拙論「社会化における絶対的自由への道」（髙澤**2011**）において記述したので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の要点を述べるに止めておきたい。

既に、上記第２章第１節「自我における絶対的不平等について」において述べたように、人間は自我においては絶対的不平等である。

さて、人間が自我において絶対的不平等であるならば、人間は自我において絶対的不自由である。なぜならば、人間が自我において絶対的不平等であるということは、個人と個人との間に、上・下の関係、支配・被支配の関係、などの社会関係（権力関係）が発生する可能性があるからである。

２・３　自我における絶対的不愛について

本節の目標は、自我における絶対的不愛は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

さて、この自我における絶対的不愛の解明については、既に、拙論「社会化における絶対的愛への道」（髙澤**2013**）において記述したので、ここでは本稿の主題の解明に必要な最小限の要点を述べるに止めておきたい。

既に、上記第２章第１節「自我における絶対的不平等について」において述べたように、人間は自我においては絶対的不平等である。

さて、人間が自我において絶対的不平等であるならば、人間には、自分より絶対的不平等の上位にいる全ての人々に対しては、嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情が生み出される可能性が誕生するであろう。また、人間には、自分より絶対的不平等の下位にいる全ての人々に対しては、哀憐・蔑視などの不愛の類の感情が生み出される可能性が誕生するであろう。したがって、人間が自我において絶対的不平等であるならば、人間には絶対的不愛の社会関係が生み出される可能性が誕生するのである。

また、既に、上記第２章第２節「自我における絶対的不自由について」において述べたように、人間は自我においては絶対的不自由である。

さて、上記のように、人間が自我において絶対的不平等であるならば、人間は自我において絶対的不自由である。なぜならば、人間が自我において絶対的

不平等であるということは、個人と個人との間に上・下の関係、支配・被支配の関係、などの社会関係（権力関係）が発生する可能性があるからである。したがって、人間が自我において絶対的不自由であるならば、人間には、自分より絶対的不自由の上位にいる全ての人々に対しては、嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情が生み出される可能性が誕生するであろう。また、人間には、自分より絶対的不自由の下位にいる全ての人々に対しては、哀憐・蔑視などの不愛の類の感情が生み出される可能性が誕生するであろう。したがって、人間が自我において絶対的不自由であるならば、絶対的不愛の社会関係が生み出される可能性が誕生するのである。

3　自我における絶対的不平等と絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について

本章の目標は、社会化における絶対的不平等と絶対的不自由および絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。この目標に向かって、まず第１節では、「自我における絶対的不平等と絶対的不自由の相関関係について」を研究する。第２節では、「自我における絶対的不平等と絶対的不愛の相関関係について」を研究する。第３節では、「自我における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について」を研究する。そして、第４節では、「自我における絶対的不平等と絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について」を研究する。

３・１　自我における絶対的不平等と絶対的不自由の相関関係について

本節の目標は、自我における絶対的不平等と絶対的不自由の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。この目標に向かって、

まず第１項においては、「絶対的不平等の先行性について」を研究する。第２項では、「絶対的不自由の後行性について」を研究する。そして、第３項では、「絶対的不平等と絶対的不自由の相関関係ついて」を研究する。

３・１・１　絶対的不平等の先行性について

本項の目標は、絶対的不平等は絶対的不自由に先行する要件であるのか、という命題を解明することである。

この「絶対的不平等は絶対的不自由に先行する要件であるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的愛への道」（髙澤**2013**）において解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

この命題を解明するために最も理解しやすい単純な例として、最も小さい集団（または社会）すなわちＡとＢの２人集団（または社会）を想定することにしよう。ＡとＢが絶対的不平等の社会的存在でなければ、両者の間に絶対的不自由の社会関係（権力関係）は誕生することができないといえるであろうか。これを確認するために、ＡとＢは絶対的不平等の社会的存在でないとしよう。そうすると、ＡとＢの社会関係は、両者が絶対的平等である集団（社会）においては、ＡとＢとの間に、上・下の社会関係、支配・被支配の社会関係あるいは権力関係すなわち絶対的不自由の社会関係が誕生する可能性がない。

したがって、ＡとＢが絶対的不自由の社会関係であるためには、その前提としてＡとＢは絶対的不平等の社会的存在でなければならない。それゆえに、絶対的不平等は絶対的不自由に先行する要件であるといえるのである。

３・１・２　絶対的不自由の後行性について

本項の目標は、絶対的不自由は絶対的不平等に後行する要件であるのか、と

いう命題を解明することである。

この「絶対的不自由は絶対的不平等に後行する要件であるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的愛への道」（髙澤**2013**）において解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

この命題を解明するために、上記第３章第１節第１項と同様に、最も理解しやすい単純な例として、最も小さい集団（または社会）すなわちＡとＢの２人集団（または社会）を想定することにしよう。上記第３章第１節第１項の結論によれば、ＡとＢが絶対的不自由の社会関係であるためには、その前提としてＡとＢは絶対的不平等の社会的存在でなければならないということが明確になった。それでは、ＡとＢとが絶対的不平等の社会的存在であるためには、その前提としてＡとＢは絶対的不自由の社会関係（権力関係）でなければならないのか。別言すれば、ＡとＢが絶対的不自由の社会関係（権力関係）であるならば、その結果としてＡとＢは絶対的不平等の社会的存在であるのか。ＡとＢが絶対的不自由の社会関係（権力関係）であるということは、ＡとＢとの間に、上・下の社会関係、支配・被支配の社会関係（権力関係）が誕生しているということである。ＡとＢとの間に、上・下の社会関係、支配・被支配の社会関係（権力関係）が誕生していることを認識根拠として、ＡとＢが絶対的不平等の社会的存在であると考えることは、人間に先天的に与えられている悟性能力では不可能である。

したがって、ＡとＢが絶対的不平等の社会的存在でなければ、絶対的不自由の社会関係（権力関係）は誕生することができないのである。それゆえに、絶対的不自由は絶対的不平等に後行する要件であるといえるのである。

３・１・３　絶対的不平等と絶対的不自由の相関関係ついて

本節の目標は、絶対的不平等と絶対的不自由の相関関係は如何なるものであ

るのか、という命題を解明することである。

さて、上記第３章第１節第１項および第３章第１節第２項の両方の結論から、絶対的不平等と絶対的不自由の相関関係については、人間に先天的に与えられた悟性能力によれば、絶対的不平等が認識根拠であり、絶対的不自由が帰結であることが明確である。

３・２　自我における絶対的不平等と絶対的不愛の関係について

本節の目標は、自我における絶対的不平等と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。この目標に向かって、まず第１項においては、「絶対的不平等の先行性について」を研究する。第２項では、「絶対的不愛の後行性について」を研究する。そして、第３項では、「絶対的不平等と絶対的不愛の相関関係ついて」を研究する。

３・２・１　絶対的不平等の先行性について

本項の目標は、絶対的不平等は絶対的不愛に先行する要件であるのか、という命題を解明することである。

この「絶対的不平等は絶対的不愛に先行する要件であるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的愛への道」（高澤**2013**）において解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

この命題を解明するために、上記第３章第１節第１項と同様に、最も理解しやすい例として、最も小さい集団（または社会）すなわちＡとＢの２人集団（または社会）を想定することにしよう。ＡとＢが絶対的不平等の社会的存在でなければ、両者の間に絶対的不愛の社会関係は誕生することができないといえるであろうか。これを確認するために、ＡとＢは絶対的不平等の社会的存在

でないとしよう。そうすると、ＡとＢの社会関係は、両者が絶対的平等である社会においては、ＡとＢの間に上位者に対する下位者の嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情や下位者に対する上位者の哀憐・蔑視などの不愛の類の感情が誕生する可能性がない。

したがって、ＡとＢの間に絶対的不愛が誕生することができるためには、その前提としてＡとＢは絶対的不平等の社会的存在でなければならない。それゆえに、絶対的不平等は絶対的不愛に先行する要件であるといえるのである。

３・２・２　絶対的不愛の後行性について

本項の目標は、絶対的不愛は絶対的不平等に後行する要件であるのか、という命題を解明することである。

この「絶対的不愛は絶対的不平等に後行する要件であるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的愛への道」（髙澤**2013**）において解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

この命題を解明するために、上記第３章第１節第１項と同様に、最も理解しやすい例として、最も小さい集団（または社会）すなわちＡとＢの２人集団（または社会）を想定することにしよう。上記第３章第２節第１項の結論によれば、ＡとＢの間に絶対的不愛の社会関係が誕生することができるためには、その前提としてＡとＢは絶対的不平等の社会的存在でなければならないということが明確になった。それでは、ＡとＢが絶対的不平等の社会的存在であるためには、その前提としてＡとＢの間に絶対的不愛の社会関係が誕生していなければならないのか。別言すれば、ＡとＢの間に絶対的不愛の社会関係が誕生しているならば、ＡとＢは絶対的不平等の社会的存在であるのか。ＡとＢが絶対的不愛の社会関係にあるということは、ＡとＢとの間に上位者に対する下位者の嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情や下位者に対する上位者の哀憐・蔑視など

の不愛の類の感情が誕生しているということである。ＡとＢとの間に上位者に対する下位者の嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情や下位者に対する上位者の哀憐・蔑視などの不愛の類の感情が誕生していることを認識根拠として、ＡとＢは絶対的不平等の社会的存在であると考えることは、人間に先天的に与えられている悟性的能力では不可能である。

したがって、ＡとＢが絶対的不平等の社会的存在でなければ、絶対的不愛の社会関係が誕生することができないのである。それゆえに、絶対的不愛は絶対的不平等に後行する要件であるといえるのである。

３・２・３　絶対的不平等と絶対的不愛の相関関係ついて

本項の目標は、絶対的不平等と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

さて、上記第３章第２節第１項および第３章第２節第２項の両方の結論から、絶対的不平等と絶対的不愛の相関関係については、絶対的不平等が認識根拠であり、絶対的不愛が帰結であることが明確である。

３・３　自我における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について

本節の目標は、自我における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。この目標に向かって、まず第１項においては、「絶対的不自由の先行性について」を研究する。第２項では、「絶対的不愛の後行性について」を研究する。そして、第３項では、「絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について」を研究する。

３・３・１　絶対的不自由の先行性について

本項の目標は、絶対的不自由は絶対的不愛に先行する要件であるのか、という命題を解明することである。

この「絶対的不自由は絶対的不愛に先行する要件であるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的愛への道」（髙澤**2013**）において解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

この命題を解明するために、上記第３章第１節第１項と同様に、最も理解しやすい例として、最も小さい集団（または社会）すなわちＡとＢの２人集団（または社会）を想定することにしよう。ＡとＢが絶対的不自由な社会関係でなければ、両者の間に絶対的不愛の社会関係が誕生することができないといえるであろうか。これを確認するために、ＡとＢは絶対的不自由な社会関係でないとしよう。そうすると、ＡとＢの両者が絶対的自由である社会においては、ＡとＢの間に上位者に対する下位者の嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情や下位者に対する上位者の哀憐・蔑視などの不愛の類の感情が誕生する可能性がない。

したがって、ＡとＢの間に絶対的不愛が誕生することができるためには、その前提としてＡとＢの間に絶対的不自由な社会関係が誕生していなければならない。それゆえに、絶対的不自由は絶対的不愛に先行する要件であるといえるのである。

３・３・２　絶対的不愛の後行性について

本項の目標は、絶対的不自由は絶対的不愛に後行する要件であるのか、という命題を解明することである。

この「絶対的不自由は絶対的不愛に後行する要件であるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的愛への道」（髙澤**2013**）におい

て解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

この命題を解明するために、上記第３章第１節第１項と同様に、最も理解しやすい例として、最も小さい集団（または社会）すなわちＡとＢの２人集団（または社会）を想定することにしよう。上記第３章第３節第１項の結論によれば、ＡとＢの間に絶対的不愛が誕生することができるためには、その前提としてＡとＢの間に絶対的不自由の社会関係が誕生していなければならないということが明確になった。それでは、ＡとＢとの間に絶対的不自由の社会関係が誕生するためには、その前提としてＡとＢとの間に絶対的不愛の社会関係が誕生し、成立していなければならないのか。別言すれば、ＡとＢとの間に絶対的不愛の社会関係が誕生しているならば、ＡとＢとの間に絶対的不自由の社会関係が誕生できるのか。ＡとＢとの間に絶対的不愛の社会関係が誕生しているということは、ＡとＢの間に上位者に対する下位者の嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情や下位者に対する上位者の哀憐・蔑視などの不愛の類の感情が誕生しているということである。ＡとＢとの間に上位者に対する下位者の嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情や下位者に対する上位者の哀憐・蔑視などの不愛の類の感情が誕生していることを認識根拠として、ＡとＢの間に絶対的不自由の社会関係が誕生すると考えることは、人間に与えられている悟性能力では不可能である。

したがって、ＡとＢが絶対的不自由の社会関係でなければ、絶対的不愛の社会関係は誕生することができないのである。それゆえに、絶対的不愛は絶対的不自由に後行する要件であるといえるのである。

３・３・３　絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係ついて

本項の目標は、絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

さて、上記第３章第３節第１項および第３章第３節第２項の両方の結論から、

絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係については、絶対的不自由が認識根拠であり、絶対的不愛が帰結であることが明確である。

3・4　自我における絶対的不平等と絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について

本節の目標は、絶対的不平等と絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

さて、絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の三者の関係はどのようであろうか。すなわちどの概念が基本的であり、どれが派生的であるか、その論理的基礎づけの関係はどのようであろうか、という問題である。この問題を解決するには、この三者を二つずつ組み合わせて、すなわち絶対的不平等と絶対的不自由、絶対的不平等と絶対的不愛、絶対的不自由と絶対的不愛、以上の三つに分けて考察すればよいであろう。

まず第１に、絶対的不平等と絶対的不自由との関係をみると、既に、上記第３章第１節「絶対的不平等と絶対的不自由の相関関係について」においてみたように、つねに絶対的不平等が理由であり、絶対的不自由は帰結である。

第２に、絶対的不平等と絶対的不愛との関係をみると、既に、上記第３章第２節「絶対的不平等と絶対的不愛の相関関係について」においてみたように、つねに絶対的不平等が理由であり、絶対的不愛は帰結である。

第３に、絶対的不自由と絶対的不愛との関係をみると、既に、上記第３章第３節「絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について」においてみたように、つねに絶対的不自由が理由であり、絶対的不愛は帰結である。

したがって、これを要約すれば、絶対的不平等はつねに理由であり、絶対的不愛はつねに帰結である。絶対的不自由は絶対的不平等に対しては帰結であるが、絶対的不愛に対しては理由である。すなわち絶対的不平等という概念から絶対的不自由が必然的に導き出され、さらに絶対的不自由という概念からまた

絶対的不愛が必然的に導き出される。「絶対的不平等　→　絶対的不自由　→　絶対的不愛」という論理的基礎づけの順序は定まっていて、これを逆にすることはできない。

4　自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について

本章の目標は、自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

この目標に向かって、まず第１節においては、「自我の五段階欲求における絶対的不自由について」を研究する。そして、第２節においては、「自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について」を研究する。

４・１　自我の五段階欲求における絶対的不自由について

本節の目標は、自我の五段階欲求における絶対的不自由は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

この目標に向かって、まず第１項においては、「生理的欲求における絶対的不自由について」を研究する。第２項においては、「安全欲求における絶対的不自由について」を研究する。第３項においては、「社会的欲求における絶対的不自由について」を研究する。第４項においては、「尊敬欲求における絶対的不自由について」を研究する。そして、第５項においては、「自己実現欲求における絶対的不自由について」を研究する。

４・１・１　生理的欲求における絶対的不自由について

本項の目標は、生理的欲求における絶対的不自由は如何なるものであるのか、

という命題を解明することである[16]。

この「生理的欲求における絶対的不自由は如何なるものであるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的自由への道」(髙澤2011)において解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

第1段階の生理的欲求がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に亘って生理的欲求における相対的不自由の状態と相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。ひとは、誰でも、生まれてから死ぬまで、この欲求の支配下にある。この支配から開放されて絶対的自由の状態になることは不可能である。したがって、一時的にその支配から解放されることはあっても、つまり一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、生理的欲求が完全に充足された状態が永続することは有り得ないので、人生の多くの時間において相対的不自由の状態におかれることになるから、絶対的不自由の状態にあると言ってよいであろう。

4・1・2　安全欲求における絶対的不自由について

本項の目標は、安全欲求における絶対的不自由は如何なるものであるのか、という命題を解明することである[17]。

この「安全欲求における絶対的不自由は如何なるものであるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的自由への道」(髙澤2011)において解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

第2段階の安全欲求がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に亘って安全欲求における相対的不自由

の状態と相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。ひとは、誰でも、生まれてから死ぬまで、この欲求の支配下にある。この支配から開放されて絶対的自由の状態になることは不可能である。したがって、一時的にその支配から解放されることはあっても、つまり一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、安全欲求が完全に充足された状態が永続することは有り得ないので、人生の多くの時間において相対的不自由の状態におかれることになるから、絶対的不自由の状態にあると言ってよいであろう。

4・1・3　社会的欲求における絶対的不自由について

本項の目標は、社会的欲求における絶対的不自由は如何なるものであるのか、という命題を解明することである[18]。

この「社会的欲求における絶対的不自由は如何なるものであるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的自由への道」(髙澤**2011**)において解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

第3段階の社会的欲求がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に亘って社会的欲求における相対的不自由の状態と相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。ひとは、誰でも、生まれてから死ぬまで、この欲求の支配下にある。この支配から開放されて絶対的自由の状態になることは不可能である。したがって、一時的にその支配から解放されることはあっても、つまり一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、社会的欲求が完全に充足された状態が永続することは有り得ないので、人生の多くの時間において相対的不自由の状態におかれることになるから、絶対的不自由の状態にあると言ってよいであろう。

４・１・４　尊敬欲求における絶対的不自由について

本項の目標は、尊敬欲求における絶対的不自由は如何なるものであるのか、という命題を解明することである[19]。

この「尊敬欲求における絶対的不自由は如何なるものであるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的自由への道」（髙澤**2011**）において解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

第４段階の尊敬欲求がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に亘って尊敬欲求における相対的不自由の状態と相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。ひとは、誰でも、生まれてから死ぬまで、この欲求の支配下にある。この支配から開放されて絶対的自由の状態になることは不可能である。したがって、一時的にその支配から解放されることはあっても、つまり一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、尊敬欲求が完全に充足された状態が永続することは有り得ないので、人生の多くの時間において相対的不自由の状態におかれることになるから、絶対的不自由の状態にあると言ってよいであろう。

４・１・５　自己実現欲求における絶対的不自由について

本項の目標は、自己実現欲求における絶対的不自由は如何なるものであるのか、という命題を解明することである[20]。

この「自己実現欲欲求における絶対的不自由は如何なるものであるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的自由への道」（髙澤**2011**）において解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

第５段階の自己実現欲求がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に亘って自己実現欲求における相対的不自由の状態と相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。ひとは、誰でも、生まれてから死ぬまで、この欲求の支配下にある。この支配から開放されて絶対的自由の状態になることは不可能である。したがって、一時的にその支配から解放されることはあっても、つまり一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、自己実現欲求が完全に充足された状態が永続することは有り得ないので、人生の多くの時間において相対的不自由の状態におかれることになるから、絶対的不自由の状態にあると言ってよいであろう。

４・２　自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について

本節の目標は、自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。この目標に向かって、まず第１項においては、「生理的欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について」を研究する。第２項では、「安全欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について」を研究する。第３項では、「社会的欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について」を研究する。第４項では、「尊敬欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について」を研究する。第５項では、「自己実現欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について」を研究する。そして、第６項では、「自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について」を研究する。

４・２・１　生理的欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について

本項の目標は、生理的欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

この「生理的欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的愛への道」（髙澤**2013**）において解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

上記第４章第１節第１項「生理的欲求における絶対的不自由について」において触れたように、第１段階の生理的欲求がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に亘って生理的欲求における相対的不自由の状態と相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。したがって、生理的欲求が、一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、完全に充足されることは有り得ないので、人生の多くの時間において相対的不自由の状態におかれることになるから、絶対的不自由の状態にあると言ってよいであろう。

さて、ひとは、生理的欲求充足状態が自分より上位にあるすべての人々に対しては、嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情を持つであろう。また、それが自分より下位にあるすべての人々に対しては、哀憐・蔑視などの不愛の類の感情を持つであろう。それが自分と全く同じ状態にある人はいないのである。

したがって、人間は、生理的欲求充足において絶対的不自由の状態にいるときには、常に絶対的不愛の社会関係が存在するので、絶対的愛の社会関係が誕生する可能性はないのである。

4・2・2　安全欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について

本項の目標は、安全欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

この「安全欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的愛への道」（髙澤**2013**）において解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

上記第４章第１節第２項「安全欲求における絶対的不自由について」において触れたように、第２段階の安全欲求がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に亘って安全欲求における相対的不自由の状態と相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。したがって、安全欲求が、一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、完全に充足されることは有り得ないので、人生の多くの時間において相対的不自由の状態におかれることになるから、絶対的不自由の状態にあると言ってよいであろう。

さて、ひとは、安全欲求充足状態が自分より上位にあるすべての人々に対しては、嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情を持つであろう。また、それが自分より下位にあるすべての人々に対しては、哀憐・蔑視などの不愛の類の感情を持つであろう。それが自分と全く同じ状態にある人はいないのである。

したがって、人間は、安全欲求充足において絶対的不自由の状態にいるときには、常に絶対的不愛の社会関係が存在するので、絶対的愛の社会関係が誕生する可能性はないのである。

4・2・3　社会的欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について

本項の目標は、社会的欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

この「社会的欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的愛への道」（髙澤**2013**）において解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

上記第４章第１節第３項「社会的欲求における絶対的不自由について」において触れたように、第３段階の社会的欲求がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に亘って社会的欲求における相対的不自由の状態と相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。したがって、社会的欲求が、一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、完全に充足されることは有り得ないので、人生の多くの時間において相対的不自由の状態におかれることになるから、絶対的不自由の状態にあると言ってよいであろう。

さて、ひとは、社会的欲求充足状態が自分より上位にあるすべての人々に対しては、嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情を持つであろう。また、それが自分より下位にあるすべての人々に対しては、哀憐・蔑視などの不愛の類の感情を持つであろう。それが自分と全く同じ状態にある人はいないのである。

したがって、人間は、社会的欲求充足において絶対的不自由の状態にいるときには、常に絶対的不愛の社会関係が存在するので、絶対的愛の社会関係が誕生する可能性はないのである。

４・２・４　尊敬欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について

本項の目標は、尊敬欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

この「尊敬欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的愛への道」（髙澤**2013**）において解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

上記第４章第１節第４項「尊敬欲求における絶対的不自由について」において触れたように、第４段階の尊敬欲求がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に亘って尊敬欲求における相対的不自由の状態と相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。したがって、尊敬欲求が、一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、完全に充足されることは有り得ないので、人生の多くの時間において相対的不自由の状態におかれることになるから、絶対的不自由の状態にあると言ってよいであろう。

さて、ひとは、尊敬欲求充足状態が自分より上位にあるすべての人々に対しては、嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情を持つであろう。また、それが自分より下位にあるすべての人々に対しては、哀憐・蔑視などの不愛の類の感情を持つであろう。それが自分と全く同じ状態にある人はいないのである。

したがって、人間は、尊敬欲求充足において絶対的不自由の状態にいるときには、常に絶対的不愛の社会関係が存在するので、絶対的愛の社会関係が誕生する可能性はないのである。

４・２・５　自己実現欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について

本項の目標は、自己実現欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

この「自己実現欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的愛への道」（髙澤**2013**）において解明してあるので、ここでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

上記第４章第１節第５項「自己実現欲求における絶対的不自由について」において触れたように、第５段階の自己実現欲求がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に亘って自己実現欲求における相対的不自由の状態と相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。したがって、自己実現欲求が、一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、完全に充足されることは有り得ないので、人生の多くの時間において相対的不自由の状態におかれることになるから、絶対的不自由の状態にあると言ってよいであろう。

さて、ひとは、自己実現欲求充足状態が自分より上位にあるすべての人々に対しては、嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情を持つであろう。また、それが自分より下位にあるすべての人々に対しては、哀憐・蔑視などの不愛の類の感情を持つであろう。それが自分と全く同じ状態にある人はいないのである。

したがって、人間は、自己実現欲求充足において絶対的不自由の状態にいるときには、常に絶対的不愛の社会関係が存在するので、絶対的愛の社会関係が誕生する可能性はないのである。

４・２・６　自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係について

本項の目標は、自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

この「自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的不愛の相関関係は如何なるものであるのか」という命題については、既に、拙論「社会化における絶対的愛への道」（髙澤**2013**）において解明してあるので、こでは、本稿の主題の解明に必要な最小限の記述に止めておきたい。

既に、上記第４章第２節第１項から第５項において触れたように、第１段階の生理的欲求、第２段階の安全欲求、第３段階の社会的欲求、第４段階の尊敬欲求、第５段階の自己実現欲求、という自我の五段階欲求における絶対的不自由の状態においては、絶対的不愛の社会関係が存在するだけであり、絶対的愛の社会関係は誕生する可能性がないのである。

おわりに

既に、本稿の「はじめに」において触れたように、本稿の目次に掲載されている、第５章から第１０章[注][文献]「英文要約」については、次回以降に掲載する予定である。ご了承下さい。